

令和6年度

研究報告

児童生徒が自分と学びをつなぎ、

よりよい自分へ向かう授業づくり

- 自立活動の個別の指導計画を活用した各教科等の指導 -

(1年次／3年計画)



山形大学附属特別支援学校

独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所

令和5年度～令和7年度 重点課題研究

「特別支援教育に関わる教育課程の基準等に関する研究」研究協力校

研究概要

研究主題の背景

<学習指導要領>

特別支援学校学習指導要領解説 総則編「改訂の基本方針」

<国際的な動向>

Well-being を実現する Agency の育成 (OECD)

<国内の動向>

令和の日本型学校教育（個別最適な学びと協働的な学び）

<学校教育目標>

みずから学び、かかわり、はたらく人を育てる

<前研究の成果と課題>



前研究の成果と課題

成果

○カリキュラム表や年間指導計画、単元シート、学びの履歴、個別の指導計画などを活用した授業づくりのシステムの整理

○学習指導要領に沿った根拠のある授業実践

課題

△子供の実態を踏まえた授業づくり

△子供にとってより学びやすい年間指導計画にするための授業改善及び教育課程の改善につながる評価の在り方

子供の姿

△学びを実感し、自ら学びに向かう姿

△学ぶ目的が分かり、必要感をもちながら学びに向かう姿

主題設定に向けて

これからの時代を生きる子供たちにとって

自ら目標を設定し、振り返りながら責任ある行動がとれるような力

を身に付ける必要がある

育成を目指す子供の姿

学びを自分事として捉え、自己の目標の実現に向かって学習に取り組む子供

授業づくりにおいて必要なこと

一人一人の障害の状況や困難さの実態把握

各教科等の特質に応じた学習活動の充実

育成すべき資質・能力を明らかにした
授業実践と改善

教育活動の質の向上につながる
カリキュラム・マネジメント

研究主題

児童生徒が自分と学びをつなぎ、よりよい自分へ向かう授業づくり

主題の捉え

- 自分と学びをつなぐ → 学びを自分事として捉える姿
授業での学びを他の教科やこれからの学びに生かそうとする姿
- よりよい自分へ向かう → 自己の目標の実現に向かって学習に取り組む姿

3年間の研究の仮説

一人一人の障害の状態や困難さなどの実態把握

各教科等の特質に応じた学習活動の充実

「何ができるようになるか」という観点から
育成すべき資質・能力を明らかにした授業実践と授業改善



児童生徒が学びを自分事として捉えることができるようになり、よりよい自分へ向かうことができる

研究内容及び方法

研究内容（1） 一人一人の指導目標を踏まえた最適な学習活動の設定	
研究方法	① 自立活動の個別の指導計画の作成、見直しを図り、児童生徒の実態把握をする。（1年次） ※「学習上の困難」に着目する。
	② 児童生徒の実態から、より効果的な学びができる単元・題材・学習活動の検討、自立活動の個別の指導計画を活用しながら一人一人に応じた手立て・配慮を設定し、各教科等の授業づくりをする。（1年次）
	③ 各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせることができるような学習過程や、問いを検討する。（2年次）
	④ 各教科等において育む資質・能力を明らかにして授業実践と授業改善に取り組む。（3年次）
研究内容（2） 授業改善につながる評価の活用の在り方の検討	
研究方法	個別の指導計画の実施状況の評価と改善を教育課程の評価と改善につながる組織的な体制や進め方の工夫について検討する。（3年間） ※教務部と連携しながら進めていく。
	① 単元シートの【どのように学んだか】の記載内容について整理・改善する。（1年次）
	② 記載内容について周知、単元シートを活用した実践を重ねる。（1年次）

今年度の研究（1年次）

自立活動の視点で一人一人の障害の状態や困難さなどの実態を把握し、根拠のある手立て・配慮を各教科等の授業に生かしていくことで、児童生徒が学びを自分事として捉える授業づくりを目指していく。

研究副題（1年次）

自立活動の個別の指導計画を活用した各教科等の指導

自立活動の個別の指導計画の活用

年度初めに自立活動に関する研修会を実施し、全職員で自立活動に対する理解を深めた。課題関連図を作成しながら複数の目で協議して見直し、再度実態把握をしながら自立活動の個別の指導計画を作成した。児童生徒の学習上の困難に着目し、自立活動の個別の指導計画を各教科等における指導で設定する手立て・配慮の根拠とした。

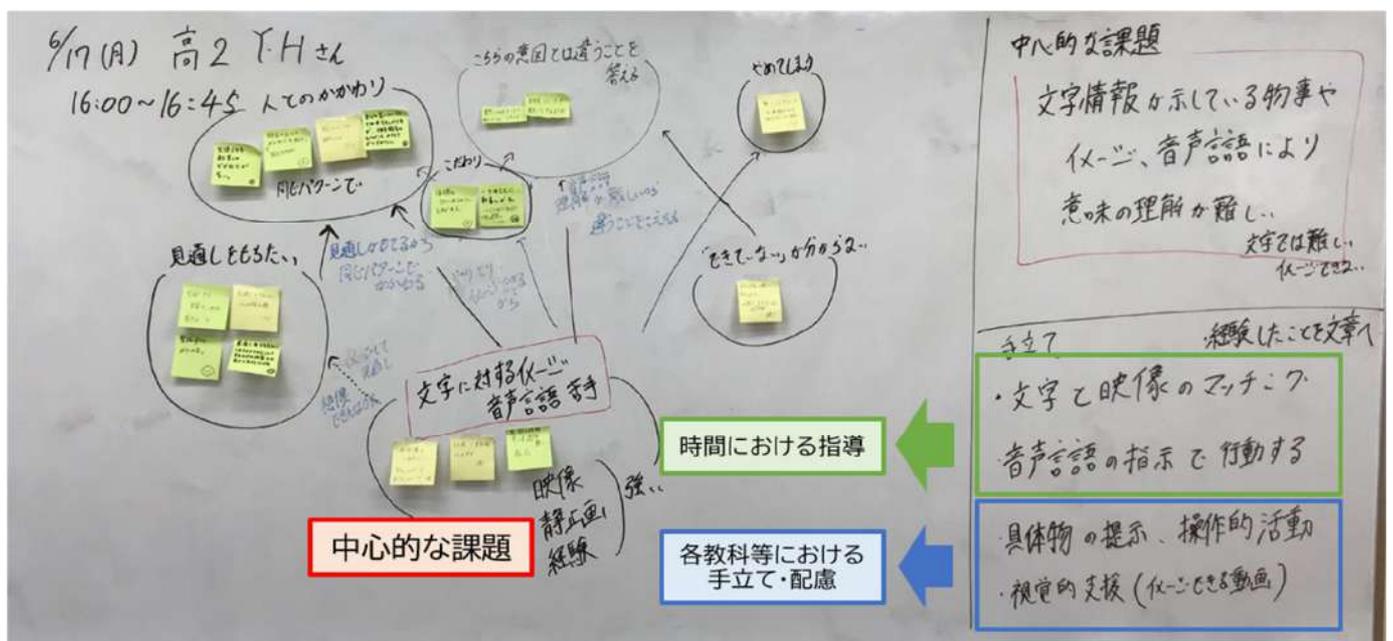
<自立活動に関する研修会>



<自立活動の個別の指導計画の見直し>



<適切な実態把握をするために作成した課題関連図（例）>



＜自立活動と各教科等との関連を図った授業づくりにおける留意点＞



各教科等における指導は、あくまで**当該教科の目標達成**を目指すものである
「学習上の困難」を明確にして手立て・配慮を設定する

＜自立活動の個別の指導計画の活用＞

令和6年度 個別の指導計画(自立活動・流れ図)

学部・学年・氏名	高等部・第2学年・山田 花子
障害の種類・程度や状態等	広汎性発達障害 軽度自閉症 SGA性低身長症 外科視(手術済み、経過問題なく終了)
事例の概要	相手の気持ちを理解し、自分の思いを伝えたり、相手の思いを受け止めたりすることができるようになるための指導

① 障害の状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所やよき、課題等について情報収集
 ・うまくいかないときや自分の気持ちを受け止めてくれない友達の行動にイライラすることがある。
 ・自分が想像した通りに物事が進まないとき、涙を流したり、一時廊下に出たりして気持ちを落ち着けようとする。
 ・特に生理前になると気持ちに折り合いをつけるのに時間がかかったり、不安な気持ちの裏返しから活動への見通しをもちたい気持ちが強くなったりする。気持ちを落ち着けようと独り言が多くなる。
 ・年上の異性とかかわり方については学習の中で覚えたが、好きな感情が押さえられずかわりたがることもある。
 ・人とかかわりが好きで、他学年、他学部、交流相手など、様々な年齢の人にも臆せず自分から話し掛ける。内容は自分の興味のあることだけの一方的になりがちである。自分から話し掛けるが、相手発信のものでは、とりとが曖昧な。
 ・同年代の友達よりも教員との関わりを好む。また、特定人物とのみ関わろうとし、全般的には関わろうとしない。
 ・自分の認知の偏りに気付かない。(聞く・見る全てできると自己評価)
 ・指摘を受け入れられないときがある。難しいと思うことはやめてしまう。
 ・一つのことに固執する。
 ・進まず言葉が通らない。
 ・話を聞いて理解することが苦手。
 ・意味理解が難しく、指示が通らないことがある。質問とは異なる内容に答えることがある。

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
・特に生理前になると気持ちに折り合いをつけるのに時間がかかったり、不安な気持ちの裏返しから活動への見通しをもちたい気持ちが強くなったりする。また、気持ちを落ち着けようとする。また、気持ちを落ち着けようとする。また、気持ちを落ち着けようとする。	・年上の異性とかかわり方について学習の中で覚えたが、好きな感情が押さえられずかわりたがることもある。	・自分の認知の偏りに気付かない。(聞く・見る全てできると自己評価) ・一つのことに固執する。 ・進まず言葉が通らない。	・人とかかわりが好きで、他学年、他学部、交流相手など、様々な年齢の人にも臆せず自分から話し掛ける。内容は自分の興味のあることだけの一方的になりがちである。自分から話し掛けるが、相手発信のものでは、とりとが曖昧な。	・人とかかわりが好きで、他学年、他学部、交流相手など、様々な年齢の人にも臆せず自分から話し掛ける。内容は自分の興味のあることだけの一方的になりがちである。自分から話し掛けるが、相手発信のものでは、とりとが曖昧な。	・人とかかわりが好きで、他学年、他学部、交流相手など、様々な年齢の人にも臆せず自分から話し掛ける。内容は自分の興味のあることだけの一方的になりがちである。自分から話し掛けるが、相手発信のものでは、とりとが曖昧な。

②-2 収集した情報(①)を学習上又は生活上の困難や、これまでの学習状況の視点から整理する段階
 ・文字に対するイメージ、音声言語の理解が難しい。(環)
 ・人との関わりが恒定的で、同じパターンで関わることが多い。(人)
 ・こちらの意図とは違うことを答える。(環・心・環)
 ・見通しがもてないことへの不安が大きい。(環)
 ・できていないという自分の状況理解が難しい。(環)
 ・指摘を受け入れられなかったり、固執したりとこだわりがある。(人・環)

②-3 収集した情報(①)を3年後の姿の観点から整理する段階
 ・自己理解と他者理解を深め、相手の言葉や気持ち、周囲の状況を受け止めて、やり取りをしようとする。
 ・特定の相手だけでなく、様々な教師や友達とかかわりを広げ、やり取りをしながら活動する。

③ (1)をもとに(あ-1) (あ-2) (あ-3)で整理した権限から課題を抽出する段階
 ・音声言語への理解が難しいため、質問と違うことを答えてしまう。(環) (心)
 ・「できていない」が分からないため、指摘を受け入れられなかったり、一つのことに固執してしまったりする。(人・環)
 ・見通しのもちやすさから、同じ人と同じパターンで関わろうとする。(環) (人)

④ ③で整理した課題同士がどのように関連しているかを整理し、中心的な課題を導き出す段階
 ・文字情報が示している物事や、音声言語による意味の理解ができるようになれば、人との関わりや関わり方の幅が広がる。
 ・文字情報が示している物事や、音声言語による意味の理解ができるようになれば、質問の意図に沿って答えたり、指摘を受け入れるなどのこだわりが軽減されたりする。
 ・音声言語の理解ができるようになれば、状況理解が促され、見通しがもてないことへの不安が軽減される。

⑤ ④に基づき設定した指導目標(抜粋)を記す段階
 課題同士の関係を整理する中で今指導すべき目標として
 ・文字が示している情報を適切に捉え、状況を理解しながら行動をする。

指導目標(抜粋)を達成するために必要な項目の選定	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
(1) (2)	(1) (2)	(1) (2)	(2)	(2)	(5)	(5)

⑦ 項目と項目を関連付ける際のポイント
 (文字が示している情報を適切に捉え、状況を理解しながら行動するために)心(1)
 (2)環(2)心(5)を関連付けて設定した具体的な指導内容が⑧ア・イ・ウ・エである。

⑧ 具体的な指導内容を設定する段階	ア 具体物の提示、操作的活動、動画を見せるなど、文字以外でイメージがもてるようにする。	イ ウ エ 文字と映像のマッチングをする。音声言語の指示を聞いて行動する。経験したことを文章で表して伝える。
選定した項目を関連付けて具体的な指導内容を設定	ア 具体物の提示、操作的活動、動画を見せるなど、文字以外でイメージがもてるようにする。	イ ウ エ 文字と映像のマッチングをする。音声言語の指示を聞いて行動する。経験したことを文章で表して伝える。

(例)
【学習上の困難】
 文字や音声言語での理解が難しい



(例)
【個別の指導計画を根拠とした手立て・配慮】
 具体物の提示・操作的活動
 一斉指示後の個別の言葉掛け

事前研究会の取組

校内授業研究会（10月）に向けた事前研究会では、今年度の研究方法を受け、以下の2点の内容を中心に各学部で授業検討を行った。

- ① 自立活動の個別の指導計画の見直しを図り、児童生徒の学習上の困難に着目して実態把握をする。
- ② 実態把握の結果から、より効果的に学ぶことのできる単元・題材・学習活動を検討するとともに、自立活動の個別の指導計画を活用しながら一人一人に応じた手立て・配慮を設定し、各教科等の授業づくりをする。

学習指導研究協議会（2月）に向けた事前研究会では、児童生徒の「当該教科で育てたい力」について検討し、学びの履歴を活用して一人一人の習得状況及び既習事項を再確認した。また、各学部の授業検討において、研究協力者（山形大学附属小学校教員）から教科の本質に迫るための指導の在り方についてアイデアをいただきながら授業づくりを進めた。（詳細はP10参照）



授業検討の様子



研究協力者との授業検討

事後研究会の取組

事後研究会では、ファシリテーターを置いて協議を行った。協議をより活発なものにするためにはファシリテーターが重要な役割を担うと考え、7月にファシリテーションに関する研修会を実施した。また、研究部員による事後研究会の進め方についてのデモンストレーションを行い、共通理解を図った。



ファシリテーションに関する研修会



事後研究会のデモンストレーション



想定される学習上の困難に対応した手立て・配慮を行うことで、児童生徒が学びを自分事とすることができていたかを明らかにするために、二つの協議題を設定した。

協議題1 学習上の困難に対応した手立て・配慮について

本時の対象児童生徒の姿から、学習上の困難に対応した手立て・配慮が有効であったか、また対象児童生徒の学習上の困難はどこにあるのかその背景を深く掘り下げながら協議した。

1 学習上の困難に対応した手立て・配慮について

本時の個別の指導目標
A(2)○○○○○することができる。

対象児童生徒A 目標に対する姿 (2)○○できた。 手立て・配慮が 有効だったか または 改善策 (本時指導案参照)	対象児童生徒A 目標に対する姿 (2)○○できなかった。 手立て・配慮が 有効だったか または 改善策 (本時指導案参照)
---	--

<有効だと考える手立て・配慮>
・目標達成のために有効だと考える手立て・配慮、その理由を記載する。(学習上の困難について確認する。)

本時における学習上の困難をボード下部に掲示する(自評でも述べる内容)

協議題2 学びを自分事にするための授業づくりについて

本時の学習活動の展開や単元計画、目標や授業時数などについて授業改善の視点で振り返り、成果や課題（改善策）を協議した。

2 学びを自分事にするための授業づくりについて

<単元目標を達成するために有効だと考える単元計画や学習展開の工夫>

<児童生徒が学ぶ目的が分かり、学びを実感できるようにするための工夫>
児童生徒と目標を共有する方法や、振り返りの在り方 等

意見交換
この項目では、対象授業についてだけでなく、事後研参加者の日々の実践や悩みなども出し合いながら協議を進める。

学習指導研究協議会の事後研究会では、学びを実感できるようにするための工夫について、参加者の日々の実践や悩みについても自由に意見交換を行った。

校内授業研究会に向けた授業づくり

※対象児童生徒の例を中心に記載しています。

小学部2組（第3学年・第4学年） 算数科 「なんばんめかな」

実態把握

【学習上の困難】

- ・注目するところを捉えて、注視することが難しい。
- ・知っている言葉が少なく、言葉の意味理解が不十分。

【授業の様子】

- ・1から10までの数唱ができ、数詞、数字で表現できる。
- ・ものを一つずつ指さしながら数え、集合数を数詞で言ったり、数字を選んだりすることができる。

単元の個別の指導目標

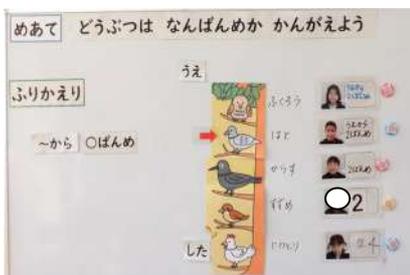
- (1) 数の系列が分かり、数を用いて順序や位置を表すことができる。
- (2) 数とものの順序や位置との関係に着目し、「○番目」の言葉を聞いてものの位置が分かったり、ものの位置を数を使って表したりする。
- (3) 数が順序や位置を表すことのよさを感じ、自分からものの位置を数を使って表そうとする。

単元計画

1	・順序数について知る。
2, 3	・順番や位置を考えて答える。（「ここから○番目」）
4, 5	・数え始める基準（左右）を決め、順序や位置を考えて答える。（「右・左から○番目」）
6, 7	・数え始める基準を明確にして、順序数を用いて、自分の欲しいものを教師に伝える。（「右・左から○番目ください。」）
8, 9	・教師の話聞き、決められた基準から数えて正しい位置のものを取る。
10, 11	・自分が隠した宝物の場所を、基準と位置を用いて教師や友達に伝える。（「右・左から○番目にあります。」） ・友達の話聞き、宝物を探す。
12	・基準と位置が示されたヒントを手掛かりに、宝物を探す。（「右・左から○番目にあります。」）

単元目標を達成するための学習活動の工夫

- ・学習のねらいが分かり、学習活動への見通しをもてるように、めあてと学習の流れを提示したり、前時で学んだことを確認したりする。
- ・生活場面で活用できるように、ロッカーを活用した宝探しや、友達と一緒に店員と客に分かれてものの位置を伝え合う模擬店を設定する。
- ・学習したことを活用することができるように、振り返りでチャレンジ問題に取り組むようにする。



学習上の困難に対応した手立て・配慮

- ・注目すべきところが分かるよう矢印で示したり、赤いテープで囲んだりする。
- ・数え始める基準となる「右」や「左」に着目し、そこから何番目かを考えることができるよう、「みぎ」、「ひだり」のカードを対象物に貼ったり、「（左右）から、○ばんめ」と答え方を統一したりする。

実践を通しての学び

- ・学習上の困難に対応した手立て・配慮等により、どこから数えるのかという基準が分かり、「みぎから2ばんめ」のように児童が自分の考えを表現することにつながった。また、言葉の意味理解にもつながった。
- ・児童によっては学習上の困難さが捉えにくいことがあった。学習する段階や題材が個の実態に適したものになっていることで、学習上の困難さが捉えやすくなることが分かった。また、児童の物の見え方や記憶などの認知面に着目することで困難さがより明確になり、単元目標を達成するために必要な手立て・配慮の設定につながることが分かった。
- ・学習指導要領の取り扱う内容のまとまりを基に、単元目標を明確にして学習活動を検討したことで、児童の興味・関心や活動内容だけの話し合いに留まらず、常に単元目標に立ち返って授業検討ができた。そのことが、基礎的な内容から生活場面等を想定した発展的な内容につながる単元計画の工夫や、食べ物など身近なものの具体物を扱う、宝探しで箱を使うなどの教材の工夫につながり、単元目標を達成する姿が見られた。

中学部 国語科 「物語を読んで考えよう」

実態把握

【学習上の困難】

- ・物語に出てくる人物の心情を想像することが難しい。
- ・自分の考えを整理することが難しい。

【授業の様子】

- ・質問を正しく理解することが難しく、質問に合わない答えを言ったり、何を答えて良いか分からずにいたりする。
- ・文章をまとまりで読むことができず、意味が理解できなかつたり誰の台詞が分からなかつたりする。

単元の個別の指導目標

- (1) 言葉には、様々な事柄や物の内容を伝える働きがあることに気付く。
- (2) ①文中に書かれた語句から登場人物の気持ちや場面の様子を考えて選択肢から選んだり、自分の言葉で友達や教師に伝えたりする。
②本文の語句やイラストを手掛かりに出来事の順序を考えて、話の内容を捉える。
- (3) 言葉を使って登場人物の気持ちや場面ごとの事柄を考えながら、友達や教師に伝えようとする。

単元計画

1	・物語の内容を大まかに捉える。
2 ～ 7	・主人公が置かれた状況を理解したり音読したりする。 ・主人公の気持ちや、その気持ちの理由について本文を根拠にして考える。 ・主人公の行動を整理して、物語の順番通りに並べたり、プリントに記入したりする。 ・主人公の心情の変化について、これまでの学習を振り返りながら整理する。
8 ～ 10	・主人公の気持ちやその理由について考えたり、主人公の気持ちになって音読をしたりする。
11	・最後まで音読し、物語を通して主人公の気持ちがどのように変わっていったか振り返る。

単元目標を達成するための学習活動の工夫

- ・心情の変化を捉えることができるように、主人公の気持ちを折れ線グラフにして気持ちの浮き沈みを可視化する。
- ・登場人物の心情を想像することができるように、台詞をどのような声の調子や大きさで読むかを考え、音読する。
- ・言葉で伝え合う力を高めるために、教師や友達とやり取りをする場面を複数回設定し、言葉で伝える経験を重ねる。
- ・感情を表す言葉を知り、学習や生活の中で使うことができるように、登場人物の気持ちを考える学習を繰り返し行う。



学習上の困難に対応した手立て・配慮

- ・主人公の心情を想像した理由について考えることができるように、教師と一緒に文章を正しく読んだり、根拠となる表現が文章のどこに記載されていたか問い掛けたりする。
- ・会話文が誰の台詞であるか分かるように、かぎ括弧の上に名前を付ける。
- ・登場人物の心情の読み取りが難しい場合は、教師とやり取りをして、生徒が自分の考えを整理したり、書き出したりする時間を十分に確保する。

実践を通しての学び

- ・本単元で扱った題材では、主語の省略などがあり、文章の難易度が高かった。対象生徒は想像することに困難さがあり、登場人物の心情を読み取ることが難しいという学習上の困難があったが、それに対応した効果的な手立て・配慮を設定することができなかった。まずは実態に合った題材を設定する必要がある。
- ・自立活動の個別の指導計画の見直しを図り、学習上の困難について検討を行ったが、課題が表面的なものだと国語科の目標を達成するための手立て・配慮を検討することが難しいということが分かった。困難さの背景について深く掘り下げることが重要である。
- ・本単元ではカリキュラム表のみを根拠に題材を設定したため、単元の個別の指導目標が実態と合っていないものになってしまった。カリキュラム表だけでなく、習得状況及び既習事項、生活経験などの実態把握や、単元で育てたい力を明確にして授業づくりをすることが必要である。

高等部 第3学年 理科 「てこのはたらき」

実態把握

【学習上の困難】

- ・根拠のある予想を考えることが難しい。

【授業の様子】

- ・実験には積極的に取り組み、自分なりに実験結果の予想もする。
- ・予想について、根拠のある説明ができない。結果から分かったことへ導くのが難しい。

単元の個別の指導目標

- (1) ・力を加える位置や力の大きさを変えるとてこの傾きが変わることや、同じ力を加えたときに支点からの距離の違いによっててこの傾きが異なることを知る。(知識①)
 - ・少しの力で解決する、てこを利用した便利な道具があることを知る。(知識②)
 - ・てこのしくみについて、実験の結果を事実を基に適切に記録する。(技能)
- (2) 力を加える位置や力の大きさを変えるとどうなるか予想し、既習内容と関係づけたり、再検討したりしながら、実験の結果を考察する。
- (3) てこのしくみについての学習に、自分から問題解決しようと学習に取り組んだり、学んだことを生活とつなげたりしようとする。

単元計画

単元目標を達成するための学習活動の工夫

1	・てこのはたらきを知る
2	・てこのはたらきを手応えで調べる①(手の位置を変える=力点を変える)
3	・てこのはたらきを手応えで調べる②(物の位置を変える=作用点を変える)
4	・てこのしくみを知る
5	・釘抜きのごきを持つと、軽い力で抜けるか調べる。
6	・簡単なてこをつくる。つりあうとき、かたむくときのきまりを調べる。
7	・前時の結果について考察する。 (結果が同じ、結果が違うに着目し、結果が違うときには、再度確かめを行う)
8	・てこを使ってどちらが重いか調べる。

- ・「てこ」のきまりについては、支点、力点、作用点の三つがあることを、視覚的に分かるようにするために、三色のシールを準備し、それぞれの点にシールを貼る活動を設定する。
- ・単元の最後には予想の根拠や理由を自分の言葉で説明することができるように、単元の初めに体験から「支点からの距離が遠いほど、軽い力でできる」ことを感じ、自分で説明する学習を複数回設定する。
- ・問題解決に向けて、実体験を通して考えたり、感じたことを表現したりすることができるように、体験的な活動を多く取り入れる。
- ・多角的な視点で予想したり、分かったことをまとめたりできるように、複数の実験を行ったり、実験結果を見比べたりできるようにする。



理由で書いてほしいこと

- ・支点から力点までの距離 が 遠い から。
- ・支点からの距離 が
- ・きさえる位置からの が
- ・赤い点からの距離 が

が(遠い、近い)から。

学習上の困難に対応した手立て・配慮

- ・教師とのやりとりを通して、考えを可視化しながら情報をまとめられるようにする。
- ・実験して感じたことを筋道を立てて話せるように、定型文を使って説明したり書いたりする学習を複数回設定する。

実践を通しての学び

- ・学習上の困難に対応した手立て・配慮により、実験結果の予想の理由を書く場面では、前時までの学習を生かしながら自分で書こうとする姿が見られた。教師とやりとりをして、理由に書く内容を更に詳しくすることにつながった。
- ・自立活動の個別の指導計画を活用し学習上の困難に対応した手立て・配慮を検討したが、普段の授業の様子などから、改めて実態把握をしたことで「根拠のある予想を考えることが難しい」という困難が明確になった。教科の面での実態把握をする必要があることが分かった。
- ・授業構想の初期段階で、当該教科で育てたい力(育成すべき資質・能力)をしっかりと確認してから授業検討を進めることで、単元における個別の指導目標の検討の際や単元を計画する際に、筋の通った授業検討につながった。

学習指導研究協議会に向けて

校内授業研究会の成果と課題（○成果、△課題）

- 全児童生徒の自立活動の個別の指導計画を見直した。困難さの背景を深く掘り下げることで、これまで表面的であった中心的な課題を見直し、仮説を立てながら日々指導に当たることができた。
- 教科の目標を達成するために一人一人の「学習上の困難」に着目するという考え方の共通理解を図ることができた。
- △中心的な課題と学習上の困難に対する捉えが曖昧である。
- △目標設定や単元計画、題材の捉え、段階の捉えなど、教科の本質を捉えた授業づくりをしていく必要がある。

学習指導研究協議会に向けた取組

- 1 学びの履歴で習得状況・既習事項を再度確認し、「当該教科で育てたい力」を明確にして授業づくりを行う。
- 2 「学習上の困難」を明らかにして根拠のある手立て・配慮を設定するために、教科の視点での実態把握をしていく。
- 3 教科の本質を捉えた授業づくりをするために、山形大学附属小学校の先生に研究協力をしていただき、単元計画や学習展開などについてアドバイスをいただきながら授業づくりをしていく。

実態把握を大事にして授業づくりをしていく！

＜事前研究会での授業検討をブラッシュアップ！＞

当該教科で
育てたい力

学びの履歴
(習得状況・既習事項)



＜研究部より＞「校内授業研究会の成果と課題」「学習指導研究協議会に向けた取組」について説明

学校研究だけでなく、日々の授業づくりにも大きく関係してくる内容のため、教務部と連携して全体へ共通理解を図った。



「よりよい授業づくりの共通理解」

- 1 カリキュラム表と年間指導計画の目的
- 2 学びの履歴、個別の指導計画の活用
- 3 授業検討の充実に向けた取組

＜教務部より＞「よりよい授業づくりの共通理解」について説明

学習指導研究協議会に向けた授業づくり

※対象児童生徒の例を中心に記載しています。

小学部2組（第3学年・第4学年） 算数科 「いくつといくつ」

当該教科で育てたい力

実態把握

本単元では、「数を、様々な分け方で表せること」「集合数とその数を二つの数に分けたときの片方の数をもとに、もう片方の数を導き出す考え方（数の仕組み）に気付くこと」「考え方を行動として実行できること」「生活場面で活用できること」をねらいとする。

【学びの履歴（習得状況・既習事項）】

・小学部1段階の学習内容の習得状況と、今年度のこれまでの学習内容の習得状況から、小学部2段階を学習することが適切だと考えた。

【学習上の困難】

・言葉の意味理解が十分でなく、問われている内容を理解して取り組むことが難しい。

・個数を思い浮かべてイメージすることが難しい。

【授業の様子】

・10個程度までのものから、「〇個。」の指示を聞いて具体物を取ることができる。

・個数を数えるときは、具体物を一つずつ指さして数える。

単元の個別の指導目標

- (1) ・一つの数を二つの数に分けたり、二つの数を一つの数にまとめたりして表す。
 - ・一つの数を二つに分けたときに、片方の数からもう片方の数が分かる。
 - ・10の補数が分かる。
- (2) 数の構成に着目し、集合数を一つの数と他の数と関連付けて考え、数詞や数字で表現する。
- (3) 数を分けたり、合わせたりする面白さを感じ、学んだことを活用して学習しようとする。

単元計画

単元目標を達成するための学習活動の工夫

1, 2	数を「分ける」、「まとめる」ことについて知る。
3~12	<ul style="list-style-type: none"> ・3から10までの数について、一つの数を二つの数に分けたり、二つの数を一つの数にまとめたりする。 ・一つの数を二つに分けたときに、片方の数からもう片方の数を考え、数字や数詞で答える。

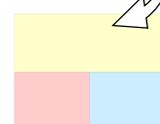
・数を「分ける」、「まとめる」という考え方が分かるように、算数ブロック（半具体物）を操作しながら学習できるようにする。また、扱う数のみを変えて授業を構成し、自分で繰り返し操作しながら学習したり、数を「分ける」、「まとめる」という考え方を活用して一方の数からもう一方の数を考えたりできるようにする。

・学習したことを視覚的に振り返ったり、前時までに学習したことを活用しながら取り組んだりできるように、「3は1と2」、「3は2と1」など前時までに学習した数の分け方を表にして掲示する。



学習上の困難に対応した手立て・配慮

- ・数を視覚的に捉えて片方の数からもう片方の数を考えられるように、集合数（黄）、分ける一方の数（赤）、もう一方の数（青）という視覚的に分かりやすく示した数のシートを用意し、その上で算数ブロックを操作する。この操作に慣れたら、見えない部分の数をイメージしながら学習することへ発展させていく。
- ・問われていることや課題が理解できるように、既習事項を思い出せるような言葉掛けをしたり、学習の流れを統一したりする。



実践を通しての学び

- ・算数科における学習上の困難さという視点で手立て・配慮を検討することで、3はブロックが■■■（3個）のように個数を視覚的に捉えられるようになり、児童が自分でブロックを操作し、数を様々な分け方で表すことにつながった。
- ・学習上の困難と、生活上の困難の関連を捉えながら共通する点について背景を深く掘り下げることで、より適切な実態把握や、単元目標を達成するための個に応じた手立て・配慮につながる事が分かった。
- ・児童が学習したことを生活場面で活用するなど生きた力として身に付けることができるように、学習指導要領の目標や内容をもとに、児童一人一人の具体的な指導内容や学習活動を設定する必要がある。

中学部 国語科 Bグループ 「伝わるように書こう～一年のふりかえり～」

当該教科で育てたい力

実態把握

国語科としては、言葉で表したり伝えたりする力、日常生活の中で必要とされる言葉を理解したり適切に使ったりする力の育成をねらう。

本単元では「自分で考えたことや思ったことを文にして書けるようにすること」をねらいとする。

【学びの履歴（習得状況・既習事項）】

・昨年度までの習得状況・既習事項から、中学部1段階の内容を学習することが適切であると考えた。

【学習上の困難】

・文章を書く際に、自分で記載内容を考えることが難しい。
・感想など問われたことに対して、よく考えずに答えることがある。

【授業の様子】

・感想などの文章を書く活動では、自分で文型を順序立てることが難しく、固まってしまうことがある。
・自分の感情が強く動いた出来事を選んだり、そのことについて話したりすることができる。

単元の個別の指導目標

- (1) 基本的な文の作り方を理解し、経験したことを「いつ、何をして、どう思った」の順に沿って、一人で文を書くことができる。
- (2) 経験したことやそのときに思ったことについて自分の言葉で書き出し、書きたい内容を決める。
- (3) 他者に自分の気持ちが伝わる喜びを感じて言葉で詳しく伝えようとしたり、他者の言葉を受け止めようとしたりする。

単元計画

単元目標を達成するための学習活動の工夫

1	・分かりやすく伝えるために必要な情報を、みんなて話し合う。 ・分かりやすく伝えるための文型について知る。
2	・「いつ・何をして・どう思った」のそれぞれについて言葉を集め、項目の順に沿って組み立て、文を作る（全体）。
3	
4	・写真を見ながら、「いつ・何をして・どう思った」の項目ごとに、言葉を出していく。 ・自分が伝えたいことを選び、言葉を項目の順に沿って組み立て、文を作る。 ・三つの項目が順番に書けたことで、他者に自分の思いが伝わることを感じる。
5 ～ 8	・一年間の学習の様子の写真から、それぞれ書きたいものを選び、そのときの出来事や気持ちを、吹き出しに書き込んで言葉を集める。 ・伝えたいことを選び、項目の順に沿って言葉を組み立てて作文し、発表する。
9	・これまで書いてきた文の中から、伝えたいことのベスト3を決めて用紙にまとめ、他グループの友達と紹介し合う。

・相手に伝わる文章にするために、順序立てて項目を構成していくとよいことが分かり、自分で書くことができるように、「いつ」「何をして」「どう思った」の項目の枠を設け、言葉を当てはめて文を作る学習を繰り返す。習得状況を見ながら徐々に支援を減らし、自分で考えて書く時間を多く設け、一人で書くことができるようにしていく。

・言葉を通して伝えたいことが相手に伝わるよさを感じて意欲的に学習に取り組めるように、自分が書いた文を友達に紹介し、どんなことが分かったか感想を伝え合う場面を設定する。

・書くために必要な項目を集められるように、同じ活動（例えば運動会）でも複数の場面の写真を用意し、生徒が経験したことやそのときの気持ちを引き出すようにする。



学習上の困難に対応した手立て・配慮

- ・「いつ、何をして、どう思った」の順に沿って文章を書くことができるように、短冊に言葉を書き、短冊を項目の順に並び替えて文を作る。
- ・経験したことやそのときに思ったことについて言葉を出し合い、教師がホワイトボードに書くことで、項目ごとに書き、情報の集め方を示す。
- ・自分が書きたいことを整理して書くことができるように、学習プリントに項目の枠を用意する。

実践を通しての学び

- ・国語科で育てたい力について検討し生徒の実態把握を丁寧に行ったことで、学習上の困難や有効な手立て・配慮の妥当性を高めることができた。授業では、経験したことについて、「いつ、何をして、どう思った」の順に沿って、一人で文を書くことができた。
- ・習得状況・既習事項から実態把握を行い、国語科で育てたい力を検討したことで、当該教科で育てたい力が明確になり、生徒のねらいにせまるための題材を設定することができた。
- ・生徒一人一人の学習上の困難に着目して学習グループを編成したことで、各生徒の実態に合った学習活動の工夫を図ることができた。生徒が伝わる喜びを感じながら文を作ろうとする姿が見られ、学びを実感する授業につながった。

高等部 第1学年 家庭科 「わたしのトートバッグ」

当該教科で育てたい力

実態把握

家庭科としては、生活をより良くしたいという想いをもち、活動の目的を理解して取り組む力の育成を狙う。

本単元では「布を使って、生活を良くする方法を知ること」「目的に応じて、縫い方を使い分けこと」「用途に応じて、適切な用具を安全に使うこと」をねらいとする。

【学びの履歴（習得状況・既習事項）】

・中学校在籍時の縫製に関する学習内容から、高等部1段階の内容を学習することが適切であると考えた。

【学習上の困難】

・課題をこなすことはできるが、何につながる活動なのかを理解しにくい。そのため、活動の意図や自身が行った工夫などの理由を問われると、説明できないことが多い。

【授業の様子】

・本人の前向きな性格から、困り感を感じにくく、課題を見つけにくい。
・考えたことを書き表すことができるが、理由を問うと答えられない。

単元の個別の指導目標

- (1) 手縫いとミシン縫いの特徴や基礎的な縫い方、用具の安全な取扱い方について目的や理由も含めて理解し、適切に縫ったり用具を扱ったりする。
- (2) 製作過程における課題に応じた縫い方について考え、工夫する。
- (3) 布を用いた製作によって生活を楽しく便利にしたい思いをもち、よりよいものを作ることを目指して活動に取り組もうとする。

単元計画

単元目標を達成するための学習活動の工夫

1, 2	・生活を楽しく便利にするために布製品があることを知り、どのようなトートバッグを製作したいか考える。
3, 4	・ミシンの使い方や直線縫いや返し縫いのやり方を知る。
5~16	・トートバッグの製作をする。 ・縫い方について考え、工夫しながら縫う。 ・自分の縫い方を振り返り、次時に気を付けたいことを考える。
17, 18	・手縫いの基本的な縫い方を知る。
19, 20	・手縫いでネームプレートを縫う。
21, 22	・トートバッグ製作を通して、自分ができるようになったことや工夫したことを伝え合う。

・トートバッグを製作する必要性を感じ、意欲的に製作に取り組めるように、学校生活を送る中で不便な場面を取り上げて伝えたり、トートバッグの形や布の柄などを選べるようにしたりする。

・今どの工程に取り組んでいるか分かるように、製作の工程や活動の流れを写真やイラストを用いながら視覚的に分かりやすく示す。

・なぜそのように縫う必要があるのか（返し縫い、持ち手のつけ方など）理由を考えられるように、きちんと縫われているものと縫われていないものを用意し、布や糸を引っ張ったり、実際に物をトートバッグに入れてみたりする。理由を考えるときには友達の考えも参考にできるように、生徒同士で話をしながら学習する。また、考えたことを振り返ったときに生徒が分かるように、生徒が発言した言葉を用いてポイントを整理する。

・縫い終わったときや失敗したときに自分の縫い方について振り返り、「なぜうまくいったのか」、「どのようにしたらもっと良くなるか」などを考えられるように、教師の問い掛けの仕方や学習プリントを工夫する。学習を通してできるようになったことが自分で実感できるように、自分が振り返ったことが見て分かるような学習プリントを準備する。



学習上の困難に対応した手立て・配慮

- ・製作工程（全体）の、どの部分（一部）に取り組んでいるか把握しながら進められるように、ホワイトボードや学習プリントで視覚的に分かるように示す。
- ・自分の活動の意図の理由を考えられるように、本人が縫うときに気を付けたいことや実際に縫ってどうだったかなどについて、具体的に問い掛ける。

実践を通しての学び

- ・縫い方の工夫について、学習プリントや教師とのやり取りだけでは、理由まで深く考えることができなかった。学習プリントの様式や教師の問い掛け方にも工夫が必要である。理由を表現する上で、教師と生徒の言葉の捉えにズレがあり、対象生徒の言語理解についてさらに実態把握をしていく必要があることが分かった。
- ・授業検討を進める中で、普段の生活の様子や個別の指導計画に示してある中心的な課題からは見えてこない家庭科での「学習上の困難」が明確になった。
- ・学習上の困難について実態把握をすることを通して、家庭科で育てたい力や単元の個別の指導目標を根拠にした生徒の実態に合った学習活動を検討することにつながった。

研究のまとめ

Ⅰ 年次研究の成果

< 自立活動の個別の指導計画の妥当性の高まり >

- ・ 自立活動の個別の指導計画の作成、見直しをする際に、「困難さの背景は何か」という視点で実態把握をしたり、複数の目で協議したりすることで、自立活動の個別の指導計画の妥当性を高めることができた。困難さを引き起こしている背景について仮説を立てながら日々の指導に当たることができている。

< 教科の視点での実態把握 >

- ・ 児童生徒一人一人の「学習上の困難」に着目することで、教科の視点での実態把握につなげることができた。これまでの実態把握は、生活上の困難という面に偏りがちであったが、当該教科の目標を達成するための困難という視点でも実態把握をすることができている。

< 学習上の困難に対応した手立て・配慮の設定 >

- ・ 「学習上の困難」に着目することで、自立活動と各教科等との密接な関連を図った授業づくりができた。各教科等における指導において、自立活動の個別の指導計画を根拠とした手立て・配慮を設定することで、当該教科の目標だけでなく、自立活動による指導の目標にも迫ることができている。

今後の課題

< 自立活動の個別の指導計画の活用の在り方 >

- ・ 自立活動の個別の指導計画の見直しをすることで、各教科等における指導の手立て・配慮の根拠とすることができた。一度見直して終わりとするのではなく、日々の授業から見えてきたことをもとに随時見直しを続け、個別の指導計画の実施状況の評価と改善につなげていく必要がある。

< コンピテンシー・ベースの授業づくり >

- ・ 学習がコンテンツ（内容）・ベースになっていることが挙げられる。学習指導要領に記載されている内容のまとまりを通して、どのような資質・能力の育成を目指すのかというには至っていない。そのためにも、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせ、より質の高い「深い学び」につなげていく必要がある。

< カリキュラム・マネジメントの推進 >

- ・ 当該教科の指導目標や指導内容が児童生徒の実態に応じたものになっていなければ、学習上の困難は明確にならず、効果的な手立て・配慮にはつながらないことが明らかになった。今年度の途中から、習得状況や既習事項を再度確認したり、当該教科で育てたい力を明らかにしたりしながら授業づくりを行なった。今後は、児童生徒にとってより学びやすい年間指導計画にするために、カリキュラム・マネジメントを推進していく。そのためにも、各教科等で育成を目指す資質・能力について明らかにして指導する必要がある。

来年度（2年次）研究

- ・ より質の高い「深い学び」につなげていくために、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる授業づくりをする。
- ・ 児童生徒にとってより学びやすい年間指導計画にするために、教育活動の質の向上につながるカリキュラム・マネジメントを推進する。

学習指導研究協議会 講演会

「知的障害のある児童生徒のための各教科・自立活動と育成を目指す資質・能力」

【講師】

独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所

情報・支援部 学校教育支援・連携担当

上席総括研究員 調整担当部長 丹野 哲也 先生



助言者・共同研究協力者の紹介

【助言者】

山形県教育局	特別支援教育課	課長補佐	森 豊	先生
山形県教育センター	特別支援教育課	課 長	古澤 智	先生
山形県教育センター	特別支援教育課	指導主事	鍵水佐知子	先生

【共同研究者】

山形大学	地域教育文化学部	教 授	大村 一史	先生
	地域教育文化学部	准教授	池田 彩乃	先生
山形大学大学院	教育実践研究科	准教授	川村 修弘	先生

【研究協力者】

山形大学附属小学校		教 諭	高橋 恵人	先生
		教 諭	熊谷 周	先生
		教 諭	鈴木 美穂	先生

山形大学附属特別支援学校

〒990-2331 山形市飯田西三丁目2番55号

TEL 023-631-0918

FAX 023-631-9758

学校HP <https://www.yamagata-u.ac.jp/shien/>

学校HP



Instagram



@YAMAGATA_FUZOKU_TOKUSHI